



Title	台湾現代詩における家郷の位相
Author(s)	上田, 哲二
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45767
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	上 田 哲 二
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 18956 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 6 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	台湾現代詩における家郷の位相
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 深澤 一幸 （副査） 教 授 北村 卓 助教授 小口 一郎

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は戦後台湾現代詩の歴史的意義とその特質を明らかにするために、そこに関わった詩人たちの軌跡を分析し、その作品を読み解く試みである。本研究は以下の点を研究仮説として設定した。

1. 台湾現代詩は中国大陆での現代詩の派生的、周縁的文学活動ではなく、台湾文学において主要な文壇の牽引車とし重要な軌跡をもっていること。
2. 戦後の台湾で活躍する現代詩人には共通点として、出身地である家郷への想いが存在する。しかしそれは西洋モダニズム思潮との出会いを経て、台湾の急速な近代化、都市化のなかで失われたものを摸索する想いである。彼らの家郷とは近代人たらしながらも、喪失した反近代の世界へのあこがれとしての鏡像である。従って過去において指摘されている余光中の「中国」、楊牧の「郷土」台湾への想いとはアジアの知識人が共通して課題としてきた近代の受容をどう捉えるかという問題意識から出たものである。

本論では台湾現代詩における近代というテーマを追及し個々の詩人の家郷意識とどのような関係にあるかを詩的言語の分析をとおしてあきらかにする。主に台湾を代表する現代詩人である楊牧と余光中の作品世界に即して上記の仮説を検証する。

1950 年代が現代主義を率いた紀弦の時代であるとするならば、60 年代は「新月派」格律詩から出発して古典主義を導入し新たな詩風を詩壇に呼び込んだ余光中が大きな足跡を残している。戦後、渡台した多くの外省系作家についてしばしば指摘されるように、1928 年に南京に生まれ共産党政府樹立以後は台湾に居を移した余光中も家郷への思いは深くその創作面でも影響を与えている。余光中をはじめとする台湾の外省系詩人たちは、10 代をすごした大陸への望郷意識を詩的言語のなかで、象徴としての中国的意象へ機能させ台湾という第二の故郷、そして留学先の米国/西洋において新たな審美空間を形成していった。また台湾本省籍の詩人たちは、大陸からの外省人文化との拮抗のなかでみずからの位置をより明確に自覚することになった。

大陸からのエミгранトである余光中にとって、家郷とは何であったか？〈祖国〉、あるいは〈民族〉とはどのようなものとして作品のなかで変遷し反映しているのか？余光中の戦後は変貌する現実の中国大陆と想像の中の〈祖国〉、そして台湾という多文化共同体の現実のなかで葛藤した軌跡として見ることができる。

台湾の生まれの楊牧（1940—）は 15 歳で詩の投稿をはじめ、60 年代に初期の主要な特徴である抒情性、吟唱に向いた律動性のある言語、耽美性が完成された。しかし、70 年代において西洋化した「現代詩」に対する批判が次々と

起こり、西洋化への反発、郷土に根ざした創作理念の追求が詩壇で主張された。70年代において、北京政府の国際的認知が進むとともに台湾国内においては文化的社会的な価値意識の更なる変容をもたらした。楊牧の50、60年代の純粋な象徴、比喩による抒情の追求から、写景叙事による「内心風景」（『年輪』後記）あるいは彼の新古典主義的伝統回帰ともいわれる転換は狭義には台湾現代詩におけるそれまでの「横の移植」から「縦の継承」へという伝統回帰による「自己の発見」とでもよべるものであり、広義には70年代における台湾本土意識の漸進的な顕在化、郷土文学そして「台湾文学」作家としての真の主体性の確立という流れのなかで理解しうるものでもある。楊牧によるとユートピアは既に失われてしまったが、しかし「それは我々人間の心の問題であり、今尚それを追求することはできる。人の為であれ、他人の為であれ、我々は美しい国を心の中に考え、作家は其中で自己の真の生命力を表現」すれば、人を感動させることができる、と彼は考える。ここで述べられているのは、70年代において出てきた「現実主義路線」に対する楊牧の回答でもある。彼の「現実主義」とは単に社会の現実を克明に映し出すものではなく、人と世界のあるべき姿を追求することであり、自らの詩人としての生命に根ざした新しい現代の神話、文学の「楽土」を創造することであった。

詩とともに台湾の作家において重視されている散文においても、楊牧、余光中は大きな位置を占めている。楊牧の近年の自伝的散文においては、人間の翳りゆく記憶を文字に刻みつけることによって、過ぎ去った時間を定着させ、普遍化させようとする視点が見えてくる。更にその記憶による過去の時間を活性化させる中で、楊牧が強く志向するものに地震や歌曲や言語の「音の記憶」それに付随する音楽性とともいうテーマが作品の底流に流れている。楊牧自身の言葉で補えば、「この春の後、追いかけてきた余震の轟きと眩暈を起こすような振動は、私に一組の神話の構造を成熟させていった。ああ、春よ、黒色の春よ」と書き、幼少時の地震体験にある啓示を得たことを告白している。それは幼児における戦慄を覚えるような体験、神との感応と呼びうるような体験であった。古代から湧きあがってくるような音と集団的無意識とは作者の原体験とも呼ぶべきルーツである。楊牧は現代の視点から過去を語るのではなく、過去の記憶と情感をそのまま忠実にイメージとして再現し、人間が抗すことのできないものに対して、「記憶」によって「悲しみ」をカタルシスへと導いていく。楊牧には近代以前に我々人間がもっていた真と美を透視する能力の存在に対する確信がある。彼は汎神論者であり、あらゆるところは神であり、逆に特定のものを崇めないという立場にたつ。最後に残るのは懷疑である。想像と経験が混在して意識のなかに溢れだしひとつの神になり、希望となる。この過程においてはたらく名づけられないものが楊牧の神である。人間の営みのなか、風景のむこうの自然のなかの真と美を見分ける能力。それらをもう一度確認しようとした作業の成果が彼の自伝三部作であった。

台湾現代詩壇における70年代初期の「唐文標事件」はそれまで詩壇の主流となっていた紀弦（1913-）に代表される現代派路線に大きな波紋を投じた論争として知られている。唐文標（1936-1985）が始めた論争は現代主義路線に疑問を突きつけた点で、70年代末の郷土文学論争への土壌を提供し、郷土文学そして台湾本土意識の深まりという広範囲な社会運動となっていた。現代派の超現実主義路線に代表される表現の晦渋さに対する批判として生まれた明解さの重視、国家として個人としての「認同」（アイデンティティ）の問題の追求は笠詩社、葡萄園詩社からだけでなく、70年代に入って創立された龍族詩社や草根詩社の若い世代の詩人たちからも主張されていた。台湾現代詩の70年代とは「横の移植」を主潮として官製の反共文学に抗したそれまでの現代主義詩壇に対する、戦後生まれで台湾本土により強い絆をもつ世代からの異議申し立てである。それは自らの土地に対する文化歴史認識をより主体的に創作意識の中に取り入れ、自己の存在を肯定し、より血肉化した形で表現しようとする要求であった。現代派の最大の意義は、台湾国民政府の反共政策のもとに薄弱であった文学の独立性、表現の自由といった基盤を確立しようと格闘し、前衛文学を批判的言説とする可能性を示したことである。しかし現代派も郷土派もその出発点として現代詩をとりまく閉塞状況を活性化しようとする基本的な認識では共通していた点があったのである。唐文標がもっていた危機意識もその意味で相通じる所があり、現代詩を自らの拠って立つ台湾本土において自律的存在として止揚させようとする意思ではめざすところは同じであった。

以上のように新時期以後の中国大陆での現代詩の隆盛以前に台湾では各種の論争を経て、より人間の心の深淵を抉り出す詩人がすでに活動している。東アジアにおける近代は、東洋文化という基層の上に因果論的合理性という一元的な規律を築こうとした時代であった。本論で明らかになったことは以下の点である。すなわち戦後のアジアでいかにして根源的思考、象徴的思考によって、自らを取り戻し、自然のリズムを取り戻そうとするか、と思惟したのが台

湾の詩人たちの世界であった。急速な近代化、都市化のなかで台湾の詩人たちは離れてきた家郷に想いをよせ、喪失した非近代的世界を重ね合わせてきた。余光中の「中国」、楊牧が描く台湾もすでに存在しない幻想の樂園であり、過去指摘されている中国や台湾への民族的ナショナリズムではない。その底流に存在するのは近代人たらしとするアジアの知識人が今も対峙し続ける西洋的近代の受容という課題である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、戦後台湾現代詩の中国大陆とは異なる独自の歴史的意義とその特質を明らかにするために、そこに関わった詩人たちの共通点たる家郷への想い、すなわち西洋モダニズム思潮との出会いを経て台湾の急速な近代化・都市化のなかで失われた前近代の世界を模索する想いを中心にすえ、近代というテーマが個々の詩人の家郷意識とどのように関係するかをその詩的言語の分析をとおして明らかにしたものである。とくに外省人を代表する余光中の「中国」と本省人を代表する楊牧の「郷土」台湾に対する家郷意識のきわめて精密な分析により、アジア知識人の共通した課題である近代の受容をどう捉えるかという問題意識を浮かびあがらせている。

本論文は、まず第一章「台湾現代詩と近代」において、台湾の現代詩がいわゆる近代化のなかでいかに影響を受け、いかに変化してきたかを、主要な先行研究により、日本の近現代詩などとの比較をも交えて、きわめて見通しよく概説したのち、論文の中心ともいべき第二・三章に入る。

第二章「余光中における家郷の位置」、第三章「楊牧と家郷—失われた楽土」の二章は、いずれも詩の分析を中心に論述し、非常に充実した独創的画期的な力作である。家郷意識を考察するうえでは必然的に選ばれるであろう2つの典型、つまり大陸出身の外省人と台湾出身の本省人たる二詩人の、内面を表す作品と外面を示す伝記や政治状況の両面から詩人に肉薄し、メジャーでありながら日本では論じられることのなかったこの二詩人の家郷意識とアジア近代との関わりをきわめて包括的説得的に描き出している。なお分析の対象となった文章資料のうち、特に詩文の翻訳は際立って優れたものであり、資料の翻訳紹介という意味からも本論文の価値は大きい。

以下の第四章「散文における近代—翳りゆく記憶」、第五章「台湾現代詩の70年代—唐文標と楊牧—」、第六章「近代主義を超えて」は、いずれもこれまで論じられることのすくなかったが重要な問題を取り上げており、それゆえにオリジナリティーを持つ。そしてまた、いずれも上記二章の論述を補強するものでもある。

ただ、詩を論じるゆえにか、客観的に論述すべきところ、著者が詩人と同一化したような記述が時としてみられるが、全体の価値をいささかも損なうものではない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値あるものと認められる。